

# 我妻榮記念館

## だより

第 9 号

発行日/2006年7月15日

発行/我妻榮記念館事務局

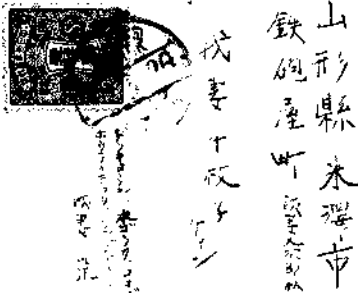
〒992-0045

米沢市中央3-4-38

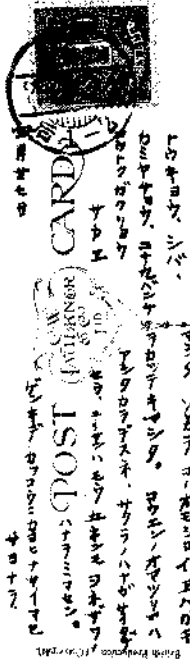
TEL・FAX 0238 24 2211



Two's Company.



山形県 米沢市  
鉄砲屋町  
我妻 千枝子



〈絵はがき（複製）は我妻榮記念館にある4枚のうちの2枚です〉

### 四枚の絵はがき（兄妹愛）

名誉館長 我妻 堯

父の急逝後数年で見が亡くな  
り、母の健康も思わしくな  
い、母の家に仏壇を引き取  
り、私の家に仏壇を引き取  
った。それを掃除し、何の気  
なしに引（うめ）の話を話  
してくれた。この叔母につ  
いてはひと言も話したこ  
とがなかった。

この四枚の葉書を読んで、改めてその理由が理解できた。父が十三歳年下の妹をどれだけ可愛がっていたか、その愛情の深さが葉書の宛名書きと文面にはじみ出ている。父が急逝した後に東京の女学校で同級だった女性から叔母の若い頃の思い出を書いた手紙を頂いた。それには「千枝子さん、私は女学校でも人気者で性格が明るく男のように行動力がある。父が東大生の頃は千枝子叔母は小学校の低学年のためにそれに合わせて読みやすいカタカナにするという父の気配りが現れている。東京から出した三枚の絵はがきは輸入品で外国の子供の絵である。四枚目には「英語の本を二冊ずつ、合計六冊送ったからお友達のお〇〇さんに上げなさい」とある。叔母は私の生まれた昭和五年の秋に二十歳の若さで亡くなったから写真でその顔を見ただけで、当然のことながらその人柄も性格も記憶にない。父は生前家庭で何かにつけて昔の米澤の家庭生活や自分の両親、姉や妹（四歳下のうめ）のことを話してくれた。この叔母についてはひと言も話したことがなかった。

ことながらその人柄も性格も記

# 百花繚乱たれ

## —我妻榮と遠藤浩の師弟愛—

館長 今田久夫

学習院大学名誉教授遠藤浩は平成十七年五月五日、八十三歳で逝去されたことは、本紙第七号に記載してあるが、先日故遠藤教授の令弟遠藤拓氏より『遠藤浩随想集―百花繚乱たれ』の書籍を頂戴した。

早速拝読して、我妻榮と遠藤浩の三十余年にわたる長く深い師弟の絆・師弟愛に深い感銘を覚えた。

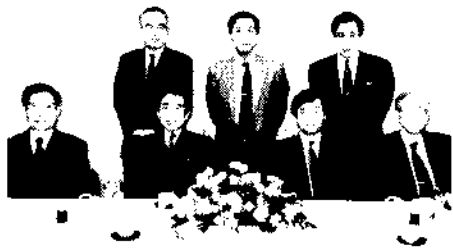
筆者は遠藤浩先輩に生前一度お目にかかっている。それは昭和二十一年夏、米沢興譲館中学校の一教室である。誰の声がかけてあったのか、先輩の講話があることを耳にして、その教室に出向いたところ、二十名程の生徒がおり、講師は遠藤浩先輩であった。(註・遠藤先輩は当時東大法学部の学生であり、しかも病気療養中であった。なお、筆者は旧制中学五年生であった。)

講話は「民主主義について」であったが、開口一番「民主主義とは型にはまらないことだ」と言われたことを記憶している。しかし民主主義の歴史的背景や

欧米諸国の政治等について語られたかは記憶にない。

さて、遠藤教授は平成八年九月十九日、母校である米沢興譲館高校創立一一〇周年記念式当日「百花繚乱たれ―挫折を越えて」の演題で生徒・教職員に講演をされている。

冒頭、演題の「百花繚乱たれ」について「野山には可憐な花もあれば華麗な花もあり、いろいろな花が咲き乱れるが、それぞれに皆きれいな花を咲かせている。あなた方にもそれぞれの道を歩いて見事な花を咲かせてほしい。そういう願いをこめて演題を決めた。」と話している。



学習院大学退官の折、送別茶話会で天皇・皇太子両陛下と共に。(前列右端が遠藤浩教授)

この記念講演と前述の書籍には我妻榮と遠藤浩の交流が細々と書かれている。それらの中から、幾つか取りあげてみたい。「物心のついた時から、父から我妻先生はいかに勉強し、いかに親しいであるか、しばしば聞かされた。それには畏敬の念と共に、若い私に反撥を覚えさせた。そして東京の先生の所についていくといわれても、頑なに拒み、結局先生に初めてお目にかかったのは一高入学後であった。」と率直な心境を語っている。

東大卒業時に「進路の相談をしたところ、君の身体では民間会社への就職は難しいだろうから、研究者になる道を選んだらどうか」と諭され、東大法学部大学院で我妻榮に師事して民法を研究し終了後、我妻榮の勧めで静岡大学、ついで学習院大学に奉職することになる。

「先生とはよく米沢の話をした。また、なぜ民法を志されたかをお聞きしたり、ある時は死生観や宗教観を伺ったこともあった。先生は一言も宗教や死のことは言われなくて、生きることだ。今をとともかく一生懸命生きることだ。」といわれた。」と。

また、ある時は平野義太郎(一高・東大で我妻榮の一年後輩)の「民法におけるローマ思想とゲルマン思想」の論文を読んで、



昭和50年頃皇太子殿下の学習院大学同級会で。(左から2人目が恩師遠藤浩教授)

大きなショックと挫折感を味わったことを話された。

遠藤浩は我妻榮の自宅や軽井沢・真鶴の別荘にも足しげく出入りしているが、昭和三四年から三五年にかけて真鶴の別荘に三週間宿泊した折、我妻榮の日々の生活―朝五時起床、冷水摩擦、茶を飲んだ後八時まで勉強、八時朝食、九時から正午まで勉強、昼食後二時まで昼寝、四時半頃まで勉強、夕食後の八時頃から勉強、十時就寝。この生活が年末・年始も変らなかつた。を見て、カントの生活を思わせるようであったと、述懐している。

さらに、亡くなる前年に真鶴から頂いた絵葉書に「今日は昨日のように机に向かっております。明日も今日のように机に向かっていてほしい。君も元氣

で」と書いてあった。このことは我妻榮が生涯たゆむことない研究心と強靱な克己心の持主であることの証といえる。

我妻榮は郷里を同じくし、しかも自分の後を慕って一高・東大と同じコースを歩み、さらに民法の研究者となった遠藤浩をたえず激励し、愛されたことは想像に難くない。

そして、遠藤浩も我妻榮を心から敬愛し、師の教導に従って、研究者として教育者として懸命に生き、師の期待に応えたといえよう。

終りに、我妻榮が小学校の恩師赤井運次郎への篤い敬師の念と麗しい師弟愛は多くの人々の知るところであるが、我妻榮と遠藤浩の師弟愛も前者に優るとも劣るものではないと考える。



平成8年9月19日我妻榮記念館を訪れる遠藤浩教授

# 米沢市立興譲小学校

## 「まがき文庫」を訪れて

運営委員 高橋 節子

緑輝く校庭、水打ちされた玄関、時折教室から子どもたちの学習の音が響いてくる校舎、歴史と伝統の風格を感じる米沢市立興譲小学校を訪ねさせていただきました。

六月六日、約東の午前十時、丸山信也校長先生は、笑顔で事務局長梅津、高橋を快く迎えて下さいました。



### 「まがき文庫」の誕生

興譲小学校創立記念式の歌

、学びのそのの 開けしは

明治じゅうさん 秋のころ

まがきの菊ともろともに

言葉の花は咲きそめぬ

、教えの庭に かよう子は

月に日にけに 数ぞえて

なおとこしえに栄ゆけと

いおうきようこそ楽しけれ

「まがき文庫」の本は、興譲



「建学の精神である。興譲」の心を継承し、歴史と伝統を踏まえながら一使命感を持って日々の教育実践を大切にする学校経営を目指す

小学校の大先輩であり、法律学者として世界的な我妻榮先生から興譲小学校の児童のために贈られたものです。そして、先生白らの発案で「まがき文庫」と命名されました。

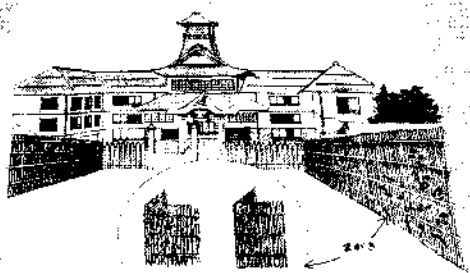
興譲小学校創立記念式の歌詞からとられたものです。先生がおかあさんとおねえさんが、よくこの歌を口ずさんでおられたとのこと、先生の心の中に自然に浮んでく

る歌詞だったのでしよう。まがき」というのは、竹や柴で編んで作った垣根のことです。掲示されている明治十三年九月創立当時の興譲小学校の写真、絵画の中に「まがき」を見出し、その時は嬉しくなりました。正門から玄関への両脇にまがきがあり、まがきにそって菊が植えられており、その様子は歌詞の通りでした。

昭和四十四年五月三十日、我妻榮先生ご夫妻がご来校、児童に講話をなさいましたその折、毎年図書を寄贈する旨を約束されたのだそうです。その日は、七百二十四冊の図書と三個の書架を寄贈されたということです。先生が興譲小学校在学の頃は、家が貧しく欲しい本も買っても

らえず、「自由に好きな本を読めるようになったらどんなに幸せだろう。」と、これが小さい頃から持ち続けられた先生の夢であったといえます。

活用されている「まがき文庫」授業中の静かなそして整美されている校舎内を、丸山校長先生は「まがき文庫」図書館へ案内して下さいました。南校舎東にある明るく気持ちのよい空間でした。児童が手に取り読んでみたくなるような本、調べる学習などに必要となる本が、見や



めくる姿が目に見えてくるようでした。

我妻榮先生のお写真、四十四年にご来校の際の先生直筆による「自主自律」の色紙など、先生に関する資料も掲示されてあります。

昭和四十四年に約束されて以来、三十七年間浄財をいただいで今では、千五百冊を越えているそうです。現在は、「白頼財団」を通していただいているとのことでした。

丸山校長先生は、「資料展示室」にも案内して下さいました。歴史と伝統を肌で感ずることの出来る貴重な多くの資料が展示してあり、時の過ぎるのも忘れて見入ってしまいました。

### 先進校としての興譲小学校

昭和四十五年度に、県、市教

育委員会の研究委嘱校が発足、この時、興譲小学校が指定校となりました。以来五十四年度、自ら学びとる力を育てる学習指導をテーマで公開発表し、現在まで学習指導の先進的役割を果たしてきています。「まがき文庫」は、この学習指導においても、また、心を育てる上においても、大きな役割を担ってきただことでしょうか。そして、これからはますます大きな存在となっていくことでしょうか。

我妻先生の御心が今も生きていることを嬉しく思い、興譲小学校の益々の発展を祈りつつ学校を後にしました。快く対応下さいました丸山校長先生はじめ職員の皆様には感謝申し上げます。



# 我妻榮児童文化賞

第十三回我妻榮児童文化賞の表彰式が二月二十五日(土)に市内ホテルサンルート米沢で行われました。受賞者は愛宕小学校六年の平山伶奈さんと南都小学校五年の大池清士君です。



平山さんは、第十六回「ひろすけ童話感想文・感想画全国コンクール」感想画の部で、全国からの応募約千二百点の中から最優秀賞に選ばれ、山形県知事を受賞した。大池君は、旺文社主催、内閣府・文部科学省後援の「第四十八回全国学芸科学コンクール」の書道の部で旺文社赤尾良夫記念賞を受賞、さらに「山形県小学生人権書道コンテスト」で最優秀賞、MOA美術館山形県児童作品展書道の部で山形県教育委員会賞を受賞した。



## 東京大学東洋文化研究所蔵

### 「我妻榮氏旧蔵資料」簡介

高見澤 磨 (東京大学東洋文化研究所教授)

東京大学には二箇所に我妻榮

先生関連資料が所蔵されていま

す。ひとつは大学院法学政治学

研究所(以下、法学部)であり、

いまひとつは東洋文化研究所

(以下、東文研)です。一九七

三年に我妻先生逝去、その翌年

に資料が東京大学に寄贈され、

法学関係資料は法学部が、アジ

ア関係は東文研が所蔵すること

となりました。東文研所蔵資料

です。整理済みのものに関し

ては、受入経緯を含めて、東京

大学東洋文化研究所図書室「我

妻榮先生旧蔵、アジア法制関係

文献資料目録」(一九八二年)

をご参照ください(同日録は本

年我妻榮記念館に東文研から寄

贈させていただきました)。

書籍の形態をとるものは整理

しやすいのですが、そうでない

もの(原稿・書簡・文書など)

は整理して閲覧に供するのが容

易ではありません。二〇〇三年

からは以下に紹介する資料の整

理に着手しています。まだ大雑

把な整理の段階ですが、以下の

ようなものです。

1、『華人民国民法物権編下』

原稿(写真をご参照くださ

い)

2、その他の華民国不動産

制度資料

3、華民国利息関係資料

4、華民国法院関係資料

5、南方・蘭印関係資料

6、海外資産関係資料

7、その他

現在を上記1に重点を置いて

整理を進めています。実は、1

の「上」にあたる部分は昭和一

六年に発行されており、なぜ

「下」が出版されなかったのか

は中国法研究者の間ではなぞで

した。まさかこんな身近なと

ころに原稿があったとは整理を

始めるまで夢にも思いません

でした。原稿をチェックしながら

出版の準備を進めています。こ

の検討作業の一環として今年

月には記念館を訪れ、いろいろ

ご教

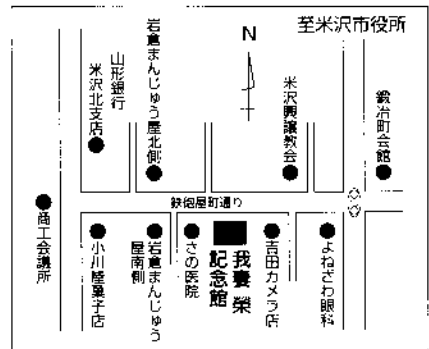
示い

ただ

さま

した。

この



**開館日のご案内**  
 金曜日、日曜日、月曜日を  
 開館日とします。  
 開館時間帯は  
 金曜日、日曜日が午後1時  
 から4時まで  
 月曜日が午前10時から午後  
 4時までです。  
 その他の曜日にご希望の場合  
 は、開館日にご連絡ください。  
 出来るだけご要望に応じるよ  
 うにしております。  
**入館料 無料**